

私とシェイクスピアと遠藤作品

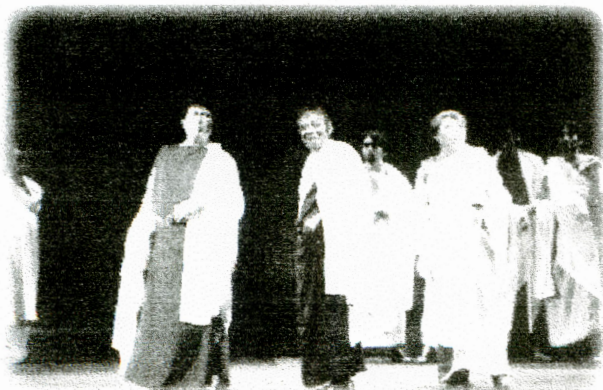
武蔵野学院大学教授 佐々木 隆

「私とシェイクスピア」の出会いとは大学での先生と板橋演劇センターとの出会いである。私がシェイクスピアを研究対象として考えるようになったのは大学院に進学した時から始まる。そして、辿りついたのは、「日本人にとってシェイクスピアとは何なのか」「日本独自のシェイクスピアとは何か」といったことだ。このテーマをひとつずつ解き明かしていくためには「日本のシェイクスピア」をリサーチすることが必須である。書誌の分野は文献調査となり、図書館等が中心となる。一方、上演の分野は単に上演年表を作成するだけでなく、生きた舞台を見て初めて演劇人シェイクスピアの真価が発揮されることから、シェイクスピア劇観劇をすることになった。そこで出会ったのが板橋演劇センターである。私の記憶では1988年9月の『オセロ』（区立文化会館）の上演が私の遠藤演出作品との出会いであったと思う。その年はフランコ・ゼッフィレリ監督映画『オテロ』をはじめ、都内でもいくつか『オセロ』の上演があり、同じ作品を違う演出で観る絶好の機会であった。

シェイクスピア劇の上演スタイルも多様化している。蛭川幸雄演出の歌舞伎、能、狂言の要素を取り入れた上演から、下館和己演出の東北弁を使用した上演まで様々である。そんな中、いつも小田島雄志訳による原作テキストを読み込んだ遠藤演出は原点

とも言えるものだ。テキストに向き合えば、書かれたことよりも書かれていないことが妙に気になってくるものだ。近代劇と違って、いわゆるト書きがなく、その分は想像力を駆使して舞台芸術を創造することになる。派手な舞台装置を使うこともなく、まさに「言葉、言葉、言葉」の世界を、何を「表現すべきか、表現しないべきか、それが問題だ」といった台詞との葛藤が背景にある。もうひとつはシェイクスピアは高尚なものといったイメージからシェイクスピアは庶民のものといった雰囲気は板橋にはある。リージョナル・シアターという地域に根差したその活動はみんなで作るシェイクスピアだけに身近に感じられる。それはなぜか。遠藤栄蔵という演出家の人柄ではないだろうか。結局は何をするにも最後は「人」によって左右されるのではないだろうか。そして上演の会場を提供している板橋区の後援も見逃せないものがある。周囲からの支援も重要である。

研究もそうであるが、人が何かを成し遂げていくには「継続の力」が不可欠である。その「継続の力」の源はいつもその上演に「このままでいいのだろうか、いけないのだろうか」と自問する演出家・遠藤栄蔵の姿だ。研究もテキスト研究だけではシェイクスピアはわからない。戯曲である以上、上演あつてのシェイクスピアだ。私自身も遠藤作品のように「自問自答」しながら研究生生活を継続したい。



ジュリアス・シーザー



アントニーとクレオパトラ